英語と計画言語

三　沢　美智子

…the problem of a language for international communication presents itself as the conflict between a planned language, Esperanto, which is known to function to the satisfaction of its users, and a hegemonic national language, which, as we all know, is, today, English.

(André Martinet)(*1)

現代社会ではさまざまなレベルでの国際的なコミュニケーションが必要とされている。異なる言語の間の壁をこえて相互理解をはからなければならない必要性にせまられている。ここに Language contacts すなわち異言語接触の問題が生じてくる。はたして Martinet の主張するような conflict が考えられるのであろうか。この稿においては，今や世界の諸言語のなかで，もっとも広く普及している言語である英語と国際語に就いて，また計画言語（あえて人工語という語は避ける）であるエスペラントに就いて，外国語教育とも関連させて考察したい。

英語はいまや世界の諸言語の中でもっともひろく普及している言語であることは否定できない。アングロ・サクソン人が，イングランドに持ち込み，その後の異言語民族殊にノルマンの侵入にももちこたえ，英語はその歴史に影響さ

＊1　Martinet,A.　"The Proof of the Pudding" *Interlinguistics*　*P*, 5
＊2　*BBC*: *The Story of English* by Robert McCrum and others. ed, by M. Sugawara. Eihosha, c1986. p. 9

れ，いみじくも Daniel Defoe がいうように Roman-Saxon-Danish-Norman English ともいえる一種の混成語的性格を持つ言語に発展した。(*2) いまでは英語はブリテン諸島の言語であるばかりではなく，世界の多くの国々の言語でもある。法的に唯一の公用語，または公用語の一つとしている国もあり，法的にはきめられてはいないが事実上の公用語として受入れている国もある。さらに，多くの国々では，政治，文化，経済等の分野での活動が英語でなされている。また，世界中で多くの人々，殊に若者達がすすんで英語を学びたがっている。英語が，進歩，近代性，などとむすび付けて考えられているからなのである。16世紀以来着実に力をつけ，七つの海を制覇し，19世紀には世界貿易の総量の四分の三をしめたともいわれた大英帝国が衰退しても，英語は独立後の旧英国植民地国に，共通語的な機能を果たすものとして残った。しかし英語の中心はブリテン島から大西洋を越えてアメリカ合衆国に移り，ここに二つの英語の変種，British English と American English が生まれた。英語が世界中に広まるにつれて英語の多様化はすすむこととなり，様々な英語の変種とか New Englishes について論じられるようになってきている。この多様性に関して，また，英語は誰のものかという議論までうまれる。英語が世界のコミュニケーションの最有力言語となっていることを示すデータには事欠かない。英語を第一言語，つまり母語とする約三億人をふくめて日常使用するのはほぼ七億人であること，世界の出版物の主要言語は英語であること，国際的なビジネス，学会，外交，スポーツ界で，広く使用されている言語は英語であること，英語は空港，航空管制の公用語であること，世界の科学者の論文の三文の二は，英語で発表されていること，世界の郵便物の四分の三は英語によるものであること，エレクトニクス情報検索システム中の情報の80%は英語であること等，等である。(*3)このように普及している英語は，万人の認める世界語となったのであろうか。もしまだであれば，そうなる可能性があるのであろうか。

＊3 Davies, A. "Is International English Interlanguage?" *TESOL Quarterly p.455.*

この問題について考察をすすめるまえに，現代の多様化した，いわゆるさまざまな英語について，整理してみる必要がある。鈴木孝夫のように，外国語教育との関連から，英語を，世界中の人の共有財産としての国際英語と，アングロ・アメリカ人の私有財産としての民族英語とに二分する考え方から，Randolph Quirk のように，英語の変種をひろく考え，法律英語，ビジネス英語などの用途分野別のものと，言語使用者の民族言語と所属国家の観点からみたものを含めた分類法まである。(*4) 小林素文は，機能面から英語を民族語，国内共通語，および国際共通語に三分する。筆者としては，下表に示すように，母語または第一言語圏，および，非母語圏（外国語圏を含む）の観点から分けたい。

- 母語としての英語
  - アングロ・サクソン人の民族語としての英語 (British English)
  - 母語となり、民族語化した英語 (American, Canadian, Australian, New Zealand English.)
- 非母語としての英語
  - 第二言語としての英語
    - 複合言語国の共通語 (Indian, East African Countries, etc.)
    - 英語圏での第二言語 (U.S.A. U.K.etc.)
  - 外国語としての英語
    - 外国語としてかなり機能している国の英語 (German, Italy, Japan, Thai, etc.)
    - ある程度の教授が行われている国の英語

＊4　Quirk, R. "Language Varieties and Standard Language." *JALT Journal* p. 11-18.

ここで忘れてはならないのは日本は言語的にみると，世界のなかで例外的な国であるということである。人口の90%以上が唯一の公用語を使用する国は，Wardhaugh によれば日本をはじめとする数箇国にすぎない（Austria, Bangladesh, The Dominican Republic, Germany, Iceland, Japan, Korea, Portugal, Tunisia)。さらに人口の大多数に，共通の言語が認められる国は世界の三分の二にすぎず，言語と国家の同一性を持つ国も日本の他僅かなのだという。世界の国の数が200未満として，単純計算をすれば20～30の言語が一つの国家に存在することになる。世界の多くの国々が複合言語国家なのである。田中克彦のいうエトノス，つまり，同じ言語，同じ風物習慣を共有する，自然的な，生物的な結合体と，国家という人為的，政治的境界とが一致するとき，その国家は自然の根拠に基づく安定性をうるが，不一致は民族問題，言語問題を生み出す大きな要因となる。(*5)上記の数字からも明らかなように，ほとんどの国が言語的に多様であり，言語的調和をはかる努力をしている。言語は民族性，identity と密接に関係するので，しばしば言語戦争にもなる。現代の世界はまだ英語を共通語とする global Village ではない。我が国における外国語教育を考えるとき，また異言語接触のさいにもこのような世界の言語事情を考慮にいれるべきである。

先に論じたような英語の多用による，様々な英語の変種に大きな関心がよせられている。外国語としてばかりでなく，母語としても，英語教育のありかたをめぐって，どの変種を数えるべきかが問題になってきている。（たとえば Charlene Satoの “teaching of Standard English as a second dialect” の見解など)，(*6)小林素文もいうように母語集団の英語はその地域の文化を反映した独自性を持ち，標準タイプの英語とは異なった様々な英語を生むからなのである。(*7)我が国の英語教育界においても，英語教育のモデル，または目標

＊5　田中克彦　国家語を越えて　筑摩書房　1989.,p.191
＊6　Sato, C. J. “A Nonstandard Approach to Standard English.” *TESOL Quarterly* v. 23,no. 2
＊7　小林素文　様々な英語　研究社　1988

言語について，Anglo-American English に限定せず，数ある英語変種のなかのいずれの英語でもよいという見解もでている。武器としての英語を主張する鈴木孝夫は，民族英語（アングロ・アメリカ人の英語）ではなく，国際英語をという。Y, Nakayama は，日本の英語教育では，“recognition model”と，“production target”の区別をするべきであり，model は，どの変種の英語でもよく，後者については“The production target for Japanese learners of English cannot, need not, and should not be Anglo American English, but it should be an indigenous variety of “valid English”(*8)と，日本人英語であるべきだという。日本での外国語としての英語教育のゴールを Japanese English に置くことは早計であろう。英語が共通語の役割を持たず，ほとんど“legacy of localized English”（Quirk,1989）のない日本のような国での英語教育，つまり外国語としての英語教育における model については，本紀要7号において主張したように，Anglo-American English がよいのではないかと考える。その根拠は，如何なる変種の英語を model として教育されたとしても，production つまり学習の成果としての英語は，学習者の母語や文化の影響をうけざるをえず，中間言語の域をこえたとしても，norm から逸脱するため many Englishes のひとつともいえる英語（Japanese English？）とならざるをえない。外国語教育においては，インプットとアウトプットとの間に，距離があるのが一般的なのである。そもそもさまざまな変種英語は，アングロ・サクソンの民族語からの，なんらかの意味での逸脱，変化したものといえる。もちろん国際的コミュニケーションの場においては，いわゆる言語愛国主義“linguistic chauvinism”（Nakamura 1989）は避けられなければならないし，如何なる変種もうけいれられなければならないが，日本のような国における英語教育のターゲットには deviationの少ない言語，即ちアングロ・アメリカン英語をとるのがよいと思われる。The deviation will

---

＊8　Nakayama,Y. “Some Suggestions for Multinational Englishes.” *JALT Journal* v.1,n.1

produce its deviation. The varieties once or twice removed could be barriers for international communications. "(*9) 変種から生まれた変種間のコミュニケーションはむずかしいのである。

以上，国際的に確固たる地位を占めていると自他共に認められている英語についてその普及状態，多様性などを外国語教育と関連させて考察してきた。はたして英語は世界語になったのであろうか。ここで異なる言語の壁をこえて直接理解をはかるための方策についてかんがえてみる。まず，相手の言語を学習すること，さもなければ，相手に己の母語を強制することであろう。第三の方策として，両者がそれぞれ自己の母語を使用しながら，円滑なコミュニケーションがはかれるほど，それぞれが相手の言語を学習している状態が考えられる。木村治美が，ある英語話者との公的な対談の際，このような方法で非常に気持ちのよい，満足のいくコミュニケーションがはかれたという体験を何処かで述べていた。この第三の方策は異言語接触に際して，理想的な方策であろう。しかし外国語の習得は容易ではない。特にその言語と母語との隔たりがあるほど，即ち，言語の類型が異なるほど，その困難はいちじるしい。一般には長期にわたる，なみなみならぬ努力が要求される。多くの時間，労力，資金を投じて，その結果に失望する学習者も少なくない。今日地球上で使用される言語の数は，3000～8000とも4000～8000ともいわれており定かではない。それは，言語には生死があり，pidgin，や Creole のように比較的短期間に誕生する言語もある。成長している言語もあれば，消滅しかけている言語もある。また方言と言語との区切り方が微妙で学者により異なることもある。言語統合であれ，言語侵略であれ，多くの小言語は大言語に圧倒され消滅しつつあるなどの事情のためである。5000語ぐらいといわれることが多いようである。しかし，言語使用者数の見地から観ると，その5000語のうち，優勢言語はごく僅かで，

---

* 9 Misawa,M. "Language Transfer. as the Main Factors Influencing Segmental Pronunciation" *Bulletin of Shinshu Honan Women's Junior College* V.7 p38

Chinese, English, Russian, Spanish, Hindi の5言語で45%, 12言語で60%, 25言語で95%を占めるという。それでも，我々にとって将来接触可能な言語は不確定なので上記の理想的な第三の方策をとることは容易ではない。第四の方策は通訳の介在によるコミュニケーションである。今日さまざまな異言語接触の場で行われているやり方である。込み入った高いレベルの外交交渉の場では勿論優れた通訳に依存するわけであるが，舞台裏での微妙な取引には通訳抜きのコミュニケーションがはかれる関係にあるほうが非常に有利である。この方策には翻訳による文献情報の交換，入手もはいるであろう。さて，第五の方策としては，両者に共通の第三の言語によるコミュニケーションをはかることである。自らの体験から得た結論として Martine は

> "I came to the conclusion that, in international contacts, linguistic communication is much easier and more profitable if it is carried out in a language which is not the native one of either interlocutor. If this is true, a simple quickly-learned medium is preferable by far to an exacting national language whose native speakers are more inclined to make fun of the foreigner's slips than to concentrate on the message. (A Martinet) (*10)

と述べている。いずれの話者の母語ではない言語によって相互理解をはかるほうが，どちらかの言語によるよりも，より容易で実りあるという。この場合の言語は両者に共通の，a native languaage いわゆる自然語の一つによることが可能であり，現実によくおこなわれている。しかしここで，Martinet が，自然語の使用に難色をしめすのは，その自然語話者によるなんらかの evaluation が避けられず，対等で，円滑なコミュニケーションの支障となるためなのである。この現象は前記の第一の方策をとる場合著しい。中村敬は「英語はどんな言語か」のなかで，ある国際会議でのエピソードを引用している。日本の代表が発表した英語のペーパーについて二人の英語の母語話者が主題に無関係

*10 Martinet,A "The Proof of the Pudding" *Interlinguistics 1989 p. 5*

なことについて意見を述べ，さらに二人の英語の母語話者が主題について日本人の英語を要約して説明しようとした。そのとき韓国の代表がその四人の態度を厳しく非難したという。少々長いが以下にその言葉を引用したい。

We will no longer tolerate this kind of attitude! Ladies and Gentlemen, we clearly and fully understand what our colleague from Japan had to say. It was absolutely insulting when two of you made comments which were completely irrelevant to the topic of the paper. It clearly indicates to me that because our colleague spoke with a Japanese accent that immediately you thought the paper was not worthy of your attention. And then the other two gentlemen, with their condescending attitude, were trying to paraphrase for us the intent of our colleague's paper. Ladies and Gentlemen, this is an international conference. It is about time that we lay down our linguistic chauvinism and restore it with some cross-cultural tolerance.

(大意：ただいま四人の見せた態度をもう見逃すわけにはいきません。皆さん，日本の代表が何を言いたいか明確に100パーセント分かるでしょう。

だからペーパーの内容と無関係なコメントをした二人の態度は人をバカ者扱いにした失礼千万なものでした。日本の代表の話す英語が日本式であったため，中身がくだらないものと速断したことは明らかです。さらに別の二人は旦那顔をしてペーパーの意図を自分達の英語に置き換えて説明してくれました。皆さん，この会は国際会議です。お互いの言語愛国主義を捨て，異文化を認め合う大きな心をもって，真の国際会議として再生させるときがきている思うのです。(*11)

中村氏自身も同様な経験を何回かもつうちに，「自然語を共通語とすることに乗り越えることのできない障壁を感じ，英語が“共通語”としての地位を獲得しつつある今日の状況を改めて考えさせられている」という。このような英

*11　中村　敬　英語はどんな言語か—英語の社会的特性　　三省堂　1989　p. 169

語の native speaker の言語愛国主義とも，大言語話者の奢りともいうべきものを特に強く感じるのは英語が外国語である人々であり，個人的親善友好の場よりは，ハイレベルの外交，ビジネス交渉の場，国際的学術会議などの場で経験すること多いであろう。

異言語接触に際しての不都合を解消するために，相互に共通の言葉を，ひいては，全人類に共通の言葉を語るようになりたいという人類の願望は，古くから存在する。Dulicenko によれば，遠く二世紀までさかのぼれるという。次表の示すように，考案されたプロジェクトは，現在までに917にものぼるが，19世紀に246，20世紀に560と，この200年間に非常に多くの試みがなされている。(*12) しかしこの多くの試みのうち，プロジェクトの域を出て，“言語”の位置に達しているもの，つまり，実際に使用されている言語は衆知の如くエスペラントである。まだ公的に国際語として認められてはいないが，実際に機能しつつあるものである。BBC でもとりあげた *The Story of English* の著者達は，そのなかで，現在英語は他国籍標準語ともいうべきものであり，人類史上初の世界語となったと明言している。さらに，1887年にポーランドのザメンホフが考案したエスペラントについて，数ある人工語の中で依然としてもっとも普及しているものであり，現在700万乃至1200万の人々に使用されているが，それはやや不自然なビクトリア朝後期の合理主義の遺物であるしかないとのべている。(*13) しかし，はたして筆者のユダヤ系アメリカ人の友人も断言したように，“Esperanto is over.” なのであろうか。現代的な，また将来的な意義は持たないのであろうか。

さてここで，用語について語義的に整理してみる必要があるとおもわれる。よく使われる「国際語」は，異なる言語間の相互理解をはかるために使用される言語と考えられる。とすれば，そのときどきで，様々な言語が国際語であり

---

*12 Dulicenko,A. D. “Ethnic Language and Planned Language.” *Interlinguistics p. 51*

*13 McCrum, Robert and others. *The Story of English* c1987 tr. by Iwasaki and others p. 56, 51.

世界共通語試作の歴史（2～20世紀）

Projects of universal and international languages				
Century	25-year period	number of language projects		
2		1		
7-8		1		
12		1		
13		1		
time unknown		8		
16	1501-1525	-		
	1526-1550	2		
	1551-1575	1		
	1575-1600	-		
	year unknown	5		
			8	
17	1601-1625	2		
	1626-1650	6		
	1651-1675	20		
	1676-1700	7		
	year unknown	6		
			41	
18	1701-1725	4		
	1726-1750	3		
	1751-1775	18		
	1776-1800	22		
	year unknown	3		
			50	
19	1801-1825	29		
	1826-1850	34		
	1851-1875	55		
	1875-1900	119		
	year unknown	9		
			246	
20	1901-1925	249		
	1926-1950	150		
	1951-1973	143		
	year unknown	18		
			560	
				917

Total for the 2nd to 20th century: 917 language projects.

うる。言語A，B間のコミュニケーションのために，A，B，またはC言語が使用されれば，それぞれA，B，またはCが，国際語の役割をはたすことになる。世界におけるあらゆる異言語接触の場で使用される国際語の意味では，世

界共通語というほうが的確であろう。異言語間のコミュニケーションのための世界共通語の試作の歴史は，前表の示すように長い歴史を持つ。

同表に示されたような912もの試みにたいして languasge でなく project の用語があてられているのは，このような planned languagesの試案は，提案された当初から language とは認められず，時をかけ，徐々に発達して"言語"の段階に到達するという interlinguistics（定着した邦語ではないかもしれないが，ここでは「国際語学」とする）の分野での一般的な見解にもとずくものである。Detlev Blanke は，language projectsを，その発展段階に応じて，

Project→ Semi-language→ Full language

と分類する。計画の大多数は第一段階の project にとどまり，少数のものが semi-language に達する。そして現在のところ最終段階に達したものは，エスペラント唯一であると主張している。(*14) つまりエスペラントは，a planned language ではなく the planned language であるといってよい。ここではすべての projects にたいして「計画言語」の語を用いることにする。なお，「人工語」の用語を避けて「計画言語」を用いるのは，前者には，いわゆる正統派言語学の立場からの，一種の蔑みともいえるニューアンスが感じられるからである。既に1947年に，エスペラントに対する競合相手の「計画言語」のひとつであるイドの旗頭のひとりの Henry Jacob は "Esperanto is today the only artificial language which has been able to form and to maintain a mass movement" と認めている。(*15) すべての計画言語のなかでエスペラントだけが将来の可能性に関する推論というよりは実際に機能している言語現象の観察に基づく研究ができる唯一のものなのである。

世界共通語の模索の歴史は，Mario Pei のいう One language for the world を将来的な目標とする共通語，つまり第一言語としての世界語を目指

---

*14, *15 Schubert,Klaus. "Interlinguistics" *Interlinguistics* N. Y., Mouton de Gruylter 1989, p.20

すものと，母語プラスの第二言語としての世界語または国際補助語の模索の歴史であるが，第一の理想はあまりにも非現実的である。人間は自発的に己の母語を放棄しない。それは自己の identity を放棄することになると考えられ，自分の属する種族と文化の否定となるからである。それゆえ世界共通語の模索は主として後者の歴史であり，それは，民族語，いわゆる自然語の使用を考えるか，計画言語を考案するかの二者択一の方向がある。民族語の使用は，その言語をその侭用いるか，その改造語，一般には単純化したものを用いるかのいずれかとなる。歴史的には，人間の体験，文化，思想は，広い意味では同種であり，何処においても必要なコードさえ与えられれば相互理解は可能だと考えるユニバーサリスト達は「自然語」を提唱し，人間の文化，思想は，本質的には固有のものであり，その言語によってのみ理解され，感得されると考える相対論者は，計画言語を提唱してきた。(*16)

世界共通語は鈴木孝夫もいうように，すべての国の人の共有財産であるから，みなが同じ権利を持つべきである。どの民族にとっても負担，労力が同じ程度の言語，つまり学習の難易度が同じであることが望ましい。同一言語内における標準語にしても，世界共通語にしても，理想は得をするひとが誰もいないことである。しかし現実は，アングロ・アメリカン英語が多くの場合国際語の役割をはたしている。理論的には，特定の何れかの民族語を世界共通語に使用することは，最良の道とはならない。いかに広く使用されているとはいえ，英語使用の一般化が問題解決にはならない。英語話者を優位におくことになるからである。このように特定の有力な言語の母語話者に特権を与えず，小言語を危機に追い込まないための一方法として前表で明らかなように，エスペラントが代表する計画言語試作が為されてきた。1887年，大国の諸言語にはさまれ，言語的偏見，不平等などに苦しむ人々が住むロシア支配下のワルシャワでザメンホフによって，ヨーロッパ系諸語をもとにして構想されたエスペラントは，民

---

*16 Davies, A. "Is International English an Interlanguge?" *TESOL Quarterly 1989, p. 451*

族，国家をこえた，中立，平等で，学び易い言語をめざした。大文豪トルストイは，ザメンホフから，小冊子を贈られて，わずか2時間でマスターしたと自ら発表している。さまざまな言葉を話す人々の間に平等なコミュニケーションを打ち立てるというエスペラントの背後にある思想を誰も批判できない。しかしそれが本質的にヨーロッパ語的特質を持つゆえに，政治的中立性は保てても言語的にはヨーロッパ優位主義であることは否定できない。アジア人である我々にとってエスペラントの学習はトルストイのようなわけにはいかないのである。しかしながら，Humphrey Tonkin もいうようにどこの国の人もヨーロッパのことばを何か学習する風潮を認めるならば，そのかわりにエスペラントを学べば，やはり学びやすいと考えられるから，何れかの欧語への橋渡し言語的に働かせることを考慮にいれることもよいのではないだろうか。100余年の歴史を持つエスペラントは，世界エスペラント協会の本部を，ロッテルダムにもち毎年世界のエスペランチストが大会につどうほか，種々の国際的な催し，出版事業，研究活動や交流等に生きた言語として使用されている。科学技術の急速な発達に伴い社会が著しい変化をとげたこの100年間にエスペラントが人間の様々な活動の領域に使用されると，エスペランチストは新しい表現方法をもとめ，語彙は増大した。英語からの借入語的な現象もみられるという。日本エスペラント学会誌によると，東欧を中心としてエスペラント・ラジオ放送もおこなわれているという。エストニアのタリン放送，リトアニアのビリニュス放送，ポーランドのワルシャワ放送，オーストラリア放送，ハンガリーのペーチ放送，ユーゴスラビアのサタレフ放送，バチカン放送，スイス放送，北京放送等である。(*17) しかしながら，エスペランチストの数の伸びははかばかしくないという。英語が世界共通語に近づいたといわれるまでに普及した理由は何であろうか。言語侵略をも伴った英帝国への発展，その帝国衰退にかわるアメリカ合衆国の国力台頭，旧英帝国植民地国における言語事情等の歴史的要素，歴史的帰結による混合語的な英語という言語的要素が考えられる。現代では経済，軍事，

*17 *La Revuo Orienta* v. 58, n. 10 (1990) p. 5.

政治力が大きな要素となっている。それとともに人々がその必要性を感じて習得する言語であることも忘れてはならないであろう。エスペラントには経済，軍事，政治力等はない。若者を中心として国際ホームステイ制度などを利用して世界旅行を目的とするエスペランチスト達もいるようであるが，一般的には，エスペラントに魅力を感ずる人はその思想にたいしてであり，精神的平等性にたいしてであろう。その背景に政治力も経済力もないので言語の学習は，101ケ国に散らばる協会員や，数十ケ国にある協会による個人的努力に依存する。日本におけるエスペラント教授について，松本清（1983）の言によると，必修または選択としての正式科目としているのは，東京大学，明治大学，神戸市立外国語大学だけで，ほとんどは，小，中，高校，および大学におけるクラブ活動で行われているそうである。(*18) それに対して，英語教育は今やビッグ・ビジネスであり，英語国の主要な「輸出品」である。現代世界における英語の優位性にたいして，エスペラント運動の理想主義は太刀打ちできそうもない。

異言語接触で，殊に問題が多いのは様々な言語話者の集まる種々の国際会議であろう。その代表的な国連では衆知のように，中国語，フランス語，ロシア語，英語，スペイン語の5言語が公用語で，後にアラビア語が一部の会議に加えられた。鈴木孝夫によると，ヨーロッパ共同体では参加国すべての言語を公用語として認めているのでその通訳のために莫大な費用と時間がかかるという。また，万国郵便連合ではフランス語が，世界民間航空機構では，英語が公用語と決められている。(*19) 公用語になれない母語の話者の不利は想像に難くない。言語とナショナリズムの問題の解決は難しいのである。学術的な国際会議や，学問分野殊に科学の分野では英語が国際補助語的役割を果たすことが多いので，英語の習得なしには情報入手に支障をきたし，ひいては学問の発展にも遅れをとることになる。英語が普及するにつれ英語に対する反発も生ずる。英語が科学分野の国際補助語となることを，あるソ連の著者は批判して，英語話者は外

＊18　松本清　“日本の学校におけるエスペラント教授”言語　1983. 10　81-83
＊19　鈴木孝夫　武器としてのことば　新潮社　1985 94-95

国語の学習の必要がなく，その時間を科学研究にあてられるので二重に有利である。さらにその国の科学技術の進歩，経済発展，政治的有利性にもつながる。そのようなことを他の国ぐにがゆるすはずはないといっている。(*20) 現実的に英語が国際補助語の役割を果たしているからといっても，英語が真の，つまり，すべての人々が認める世界共通語になったのでも，なりうるとも言えないのではないか。しぶしぶ英語にその座を譲らざるを得なくなったフランス語なども英語の侵入を防ぐべく必死である。人類の歴史をたどると，地理的，活動分野的に制限されたものではあるが，一種の共通語の役目を果たした言語が現われては消えた。第二次世界大戦以後の英語の地位は今迄になかったほどの確固たるものになりつつある。民族語が共通語となることの不合理を認められながらも現実主義が理想に勝る人間社会において，現在は英語がその地位にあるのだが，それは一種の必要悪ともいえる。英帝国のあとを引き継いだアメリカの勢力により築かれてきた英語の地位がどうなるのか，アメリカの国力とは無関係に，アングロ・アメリカン英語を一変種とする様々な変種がますます普及するのか，またはそれに代わる民族語が台頭するのかは分からない。エスペラントの理想は，人類の言語問題について，一種のチェック機能として絶えず我々にはたらきかけていくとともに，理想実現への問いかけを続けるべきであろう。

英語話者に望みたいことは下記の引用にも伺われるような大言語主義的思い上がりを捨て，様々な英語変種の理解につとめ，外国語としての英語教育に際しては学習者の母語を学習し，一方的「宗主国家語」（田中克彦）の，押付け的態度をとらないことである。アメリカの Lehigh 大学では学部学生にたいして外国語を必修科目からはずしたという。外国語学習の価値を疑問視するためではなく，従来の外国語必修が効果をあげていないからだという。外国語学習に無関心な学生に一，二学期必修としても効果はないので，そのかわり外国の歴史，文化，宗教，外交，等を学ばせ言語に関心を持った学生に選択させる

---

*20 Large, A. *The Artificial Language Movement.* Oxford:Basil Blackwell, c1985 p.20

ほうがよいという趣旨のようである。同大学の外国語学部主任はさらに，Arabic, Chinese, Japanese, Russian のような難しい言語を必修のひとつとして学習させる理由はないという。その時間を外国事情などの学習にあてるほうが教育効果があがるというわけであるが，これは外国語学習にともなう普遍的問題なのである。田中克彦もいうように母語で提供される知的分野の広さ深さは，外国語学習におけるそれとは比較にならないのである。この事情は学年がすすむほど両者の差は絶望的におおきくなるのである。それにもかかわらず，非英語母語者は外国語学習に時間とエネルギーを注いでいるのである。

"In a world where virtually everyone else makes strenuous efforts to learn English, it seems inappropreate to merely require of all U S students a modicum of language study so late in their academic careers." (*21).

事実上世界中の人々が熱心に英語を学んでいるのであるから，アメリカの大学生に外国語を僅かばかり必修させるのは適切ではない，というのはどうであろうか。相手の母語に関心なくしては，たとえ英語を介してのコミュニケーションであっても，充分理解し合えないし，何故相手の使用する英語が少々違うのか理解できないであろう。

---

*21 Pankenier, David. "Ineffective Methods, Western Bias" *The Daily Yomiuri 10,18,1990.*

Works Consulted

Blanke, Detlev. " Socipolitikaj Influoj Kaj la Internacia Lingvo(Shakaiseiji gaku-teki eikyo to Kokusaigo)". *Socilinguistikaj Aspectoj de la Internacia Lingvo (Gengo-teki tayosei no naka no Kokusaigo wo Kangaeru)* Text in Esperanto and Japanese. Tokyo: Japana Esperanto-Instituto, 1987.

Chen, Yuan. " Gakusaikagaku to shite no shakaigengogaku" *Gengo* 11−10, 1982. PP 82−91

_____ " Multilingva Socio : Interlingvo au Komulingvo Kaj Internacia Lingvo. " (Tagengo shakai no Kokusaigo) *Socilingvistikaj Aspectoj de la Internacia Lingvo.* (Gengoteki tayosei no naka no Kokusaigo o Kangaeru) Tokyo : Japana Esperanto-Instiuto, 1987.

Christian, Donna. " Language Planning : the view from linguistics " *Linguistics : the Cambridge Survey IV.* Cambridge : CUP, c 1988. pp 193−209.

Crystal, David *Cambridge Encyclopedia of Language.* Cambridge : CUP, 352−356, 357−359, 360−363, 364−367, 368−377, c 1987.

Davies, Alan. " Is International English an Interlanguage?" *TESOL Quarterly* 23,3 (1989) pp 447−467.

Deguchi, Kiotaro. *My Travels in Esperanto-land,* tr. by Michael A. Lamb. Oomoto Headguarters, 1968.

Dulicenko, Aleksandr Dmitrievic. "Ethnic Language and planned Language." *Interlinguistics.* ed. by Klaus Schbert. N.Y.:Moulton de Gruyter, 1989

Forster, Peter G. *The Esperanto Movement.* The Hague, Mouton. C 1982

_____"Cu (Artefarita) Internacia Lingvo estas Revo Neatingebla?"

(Kokusaigo wa mihatenu yume ka?) *Socilingvistikaj Aspectoj de la Internacia Lingvo.*" (*Gengo-teki tayosei no nakano kokusaigo o kangaeru*) Tokyo, 1987. in Es. & Jap.

Frank, Helme. "Utileco de la Internacia Lingvo keil Pontingvo kaj Referenclingvo por Edukado kaj Scienca Komunikado."
(Kyoiku oyobi kagaku-jooho tsushin no tameno hashi-watashi gengo oyobi sansho gengo to shiteno Esperanto no yuyosei) . *Socilingvistikaj Aspectoj de la Internacia Lingvo.* Tokyo, 1987. in Es. & Jap.

Goto, Hitoshi. "Interlingvistikaj Diskutoj en la Historio de Lingvistiko."
(Gengogaku to kokusaigoron). *Socilingvistikaj Aspectoj de la Internacia Lingvo.* Tokyo, 1987. in Es & Jap.

後藤　斎　"言語学史の中の国際語論"　言語　12,10 (1983) 65－69.

橋本　武　"英米語，新英語，国際語"　現代英語教育 1989, 12 10－12

Kanno, Hiroomi. "Pozicio de la Korea Lingvo en la Lingva Edukado en Azio." (Ajia ni okeru gengokyoiku ni shimeru chosengo noichi) *Socilinguistikaj Aapectoj de la Internacia Lingvo.* Tokyo, 1987. in ES. & Jap.

小林　素文　様々な英語 (Englishes)　東京　研究社　1988　pp 51－59

_____"世界の言語事情と英語"　英語教育 1990, 2 pp 8－59

Large, Andrew. *The Artificial Language Movement.* Oxford : Basil Blackwell c1985.

Longman' s Dictionary of Applied Lingistics. ed by Jack Richards and others. Tokyo : Nan' undo, c 1985.

McArthur, Tom. *A Foundation Course for Language Teachers.* Cambridge : CUP, c1983 pp.78-82.

Martinet, André. "The Proof of the Pudding…" *Interlinguistics.* ed. by

Klaus Schubert. N.Y.:Mouton de Gruyter ,1989.

松本　清："日本におけるエスペラント教授"　言語　1983,10 P.81-83

Nakayama, Yukihiro. "Some suggestions for Multinational Englishes." *JALT Journal*.11.1 (1987) pp.26-33

Pankenier, David. "Ineffective Methods, Western Bias." *The Daily Yomiuri* 10,18,'90

Pei, Mario. *One Language for the world.* N.Y.:The Devin-Adair, 1961.

People' s Encyclopaedia. Garden City:Doubleday, 1975.

Peron, Claude. "Nacieco Kaj Internacieco de Esperanto." (Esperanto no minzokusei to kokusaisei) Socilingvistikaj Aspectoj de la Internacia Lingvo. Tokyo, 1987. in Es. & Jap.

Platt, John et al. *The New Englishes.* Routledge & Kegan Paul, 1984.

Quirk Randolph. "Language Varieties and Standard Language." *JALT Journal 11,1 (1987)* pp14-25.

Sato, Charlene J. "A Nonstandard Approach to Standard Engliah. *TESOL Quarterly 23,2 (1989) 259-282.*

Schubert, Klaus. ed. *Interlinguistics: aspects of the science of planned languages. (Trends in linguistics Studies and Monographs 42)* N.Y.:Mouton do Gruyter, 1989.

Sekelj, Tibor. "Cu Ia Socio Bezonas Ia Internacian Lingvon?" (Shakai wa kokusaigo o hitsuyo to shiteiru ka)*Socilinguistikaj Aspectoj de Ia Internacia Lingvo.* Tokyo 1987. in Es & Jap.

Song, Zino. *An Introduction to Linguistics.* Tokyo : Nan'undo, 1989.

鈴木　孝夫　ことばの社会学　東京　新潮社　1987

鈴木　孝夫　武器としてのことば　新潮社　1985

田中　春美　"国際語としての英語"　英語教育　1988,9

田中　克彦　"エスペラントを包囲する言語イデオロギー"言語

1983,10,74—76

_____言語の思想——国家と民族のことば　NHKブックス　1975

_____“国家語と国際語”(Stataj Lingvoj Kaj Internacia Lingvo) *Socilingvistikaj Aspectoj de Ia Internacia Lingvo.* 東京 1987

_____国家語を越えて——国際化の中の日本語　東京　筑摩書房 1989

TonRin, Humphrey. “Esperanto Kaj Ia Angla Lingvo.” (Esuperanto to Eigo) *Socilingvistikaj Aspectoj de Ia Internacia Lingvo.* Tokyo, 1987. in Es & Jap.

鶴見　俊輔　“日本語と外国語”　外国語　河出書房　1978 256—263

Trudgill, Peter & Hannah Jean. *International English* tr. by Terasawa & Umeda. Tokyo: Kenkyusha, 1985.

和田　裕一／梅棹　忠夫　“民族とコトバ”　外国語　河出書房　c 1978

Wardhaugh, Ronald. *Languages in Competiton : Dominance, Diversity, and Decline.* Oxford : Basil Blackwell, c 1978.

Yashiro, Kyoko. “Sociolinguistic Considerations for the Teaching of English as an International Language in Japan.” *The Language Teacher XII : 4 (1988)*

Zhang, Qicheng. “La Evoluo de Esperanto Kaj Lingvo Neutraleco.” *Socilingvistikaj Aspectoj de la Internacia Lingvo.* Tokyo : Japana Esperanto-Instituto, 1987.